
【主題】 未来につながる力を全ての子どもたちに

【副題】 読書の習慣化に目を向けて

【学校・団体名】 福井県福井市松本小学校

【役職名・氏名】 校長 向井 雅子

1 はじめに

30代のとき、勤務校が文部省（当時）から「図書館ボランティア活用実践」の研究指定を受けた。司書教諭で図書主任だった私は、図書館ボランティアの組織づくりを行い、募集に応じてくれた保護者や地域の人たちと児童の読書活動推進のための取組を進めた。大変であったが、ボランティアや周りの先生方の協力に支えられ、児童の読書活動は活発になり、教師として非常に充実した時間を過ごすことができた。

薦められてその成果を全国学校図書館協議会の「学校図書館賞」に応募した。良い結果を得ることはできなかったが、精一杯の成果を書き、満足であった。しかし、講評で、担当者個人の工夫と努力は評価されるが学校全体の取組となっていないことが残念であるというような指摘を受けた。当時の私にはよく理解できないまま、その指摘がずっと心にひっかかっていた。

管理職となり、改めて当時をふり返って思うことは、取組の意義は、熱意や内容も大切であるが、学校全体が同じ方向を向き、教職員全員が一丸となって取り組むことにあるのではないかということである。その成果と課題を教職員全員で共有し、次へとつながる動きを生み出すために、何より校長のリーダーシップが重要である。校長となった自分が取組をどう進めるか、30代の経験から得た大きな課題であった。

2 本校児童の現状

令和2年度、校長として本校に赴任した。スクールプランを作成するにあたり、これまでのスクールプランや児童アンケートの結果等に目を通し、本校児童の状況をつかもうとした。

まず目についたのが、平成31年度（令和元年度）のスクールプランにおいて、確かな学力をつけるための重点項目に「読書活動の推進」が挙げられているが、他の項目に比べて達成目標の数値が低いことであった。他の重点項目は皆、該当する児童アンケートの肯定的回答が80～90%を目指しているのに対し、読書活動の推進については、「自分は進んで読書をしている」

と答える児童の割合が70%を目指すにとどまっていた。気になって前年度までのアンケート結果に目を通すと、平成28年度は58%、平成29年度は59%、平成30年度は67%であった。70%を目指した平成31年度のアンケート結果は70%で、達成目標ちようどの結果であった。

確かにアンケート結果は他の重点項目より低い数値ではあったが、3年間で12%アップしており、これは手応えのある数値だと感じた。司書教諭（図書主任）に話を聞くと、平成30年度から31年度にかけて、図書室の本の配置をNDC（日本十進分類法）に基づいて大幅に変え、児童が利用しやすい図書室環境の整備を行ったことが分かった。新しくなった図書室に児童が集まり、積極的に読書をする子が増えたのである。

数値目標は70%であるが、のびしろのある数字である。本校の読書活動を活発にするのは今がチャンスだと感じた。

学力向上のために読書は大切だと言われる。確かに読書をするにより身についた語彙力は考えや表現を豊かにし、学力向上に効果があると思う。しかし、読書には即効性はないのである。本をよく読むようになったからといってすぐ成績が良くなるわけではない。私は、よく、読書活動の推進は「種をまく活動」だと言っている。すぐに芽が出るわけではないが、将来必ず生きて働く力となると確信している。多様な価値観の中、予測できない複雑な社会を生きる子どもたちが心のよりどころにしたり、生き方の参考にしたりするのに、読書習慣が身につけていることは何物にも代えがたい力だと私は考える。私は、将来のため、松本っ子に読書を楽しむ経験を積ませ、読書習慣を身に付けさせたい、今がその時だと感じた。

私が赴任した令和2年度はコロナの休校から始まった。学校を再開するにあたり、感染拡大防止のため活動に制限を設けることが多く、これまでになく新しい様式を生み出さなくてはならなかった。多くの学年が集まる休み時間の図書室での貸出も当分行わないことになった。どうしたら松本小の児童の読書の伸びを止

めないですむのか。スクールプランに掲げた「読書活動の推進」はコロナ対策とともに私の課題となったのである。

3 取組の重点

- 児童にとって一番身近な存在である担任が取組の中心となる。
- 日常生活の中で継続的に取り組む。
- 読みたい本をいつも身近に置き、読む時間を確保する。

4 取組の概要

① スクールプランに掲げ、自己目標に取り入れる

令和2年度の本校のスクールプランには、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」「家庭・地域との連携」の4つの柱があり、「確かな学力」の取組の重点として「読書活動の推進」を挙げた。この重点を受け、教職員は自己目標の一つに読書の取組を挙げ、各自目標管理表を作成した。年度はじめに校長の方針を話す中で、決して大きな取組を望むのではなく、国語や学活の時間を利用して学級単位で図書室へ行き本の貸出・返却を行ったり、朝の時間や授業のすきま時間に本を読む時間を設けたりするなど、簡単な取組を継続して行ってほしいと伝えた。学校の中で児童の一番身近にいる担任が取組の中心になることで、全ての児童を対象にした取組となることが保障される。家庭まかせではなかなか浸透しないことも、学校は、全ての子に平等に機会を与えることができる場である。個人の興味関心にまかせがちな読書について学校全体で取り組むことは、読書に親しみ、読書習慣の形成と定着を図るのに有効であると話し、教職員全員の共通理解を図った。

② 学級ごとに本の貸出

令和2年度は、コロナの感染拡大防止のため、休み時間、校庭や体育館での自由遊びを交代制にするなど、学級や学年を超えた交流への制限が多く、教室で過ごす時間が増える中で、読書は児童の楽しみの一つとなった。普段図書室を利用しなかった子も、学級全員で図書室に行って本を借りて読むことにより、本を選ぶ楽しさを感じたり、本のおもしろさを味わったりすることができるようになった。



担任と一緒に図書室へ

③ 読む時間の確保

本校は、以前から児童一人一人が「本バック」を持ち、机の横に掛けて利用している。図書室に行くときには本バックを持って行き、借りた本を本バックに入れておくようにしている。授業中のすきま時間でも、立ち上がることなく読みかけの本を取り出し、即読書を始めることができるのである。これまで、あまり図書室を利用しない児童は、本バックが空っぽだったり、読み終わった本が入ったままだったりした。しかし、学級ごとに週に1・2回図書室に貸出に行くようになり、どの児童も読みたい本や読みかけの本がいつも本バックに入っているようになった。読む本がいつも身近にあることはとても大切なポイントである。5分程度のすきま時間でも本を読むことに集中する児童が増えた。図鑑のような本を楽しむ児童もいて、大好きな写真や絵を食い入るように眺めている。読む本と読む時間が保障されれば、子どもは自然と読書を楽しむようになる。本来、子どもは読書が大好きなのだ。



読書タイム（6年生）

各自機の横には本バックが

④ 面談で進捗状況の把握

9月には、教職員人事評価の中間評価のため、各教職員と面談を行う。スクールプランの実現に向けて各自が立てた目標について進捗状況の確認を行い、年度後半の取組について助言を行うなど、見通しがもてるよう話し合う。面談時間の多くは各教職員が抱える課題についてあてることになるが、必ず読書の取組については進捗状況を確認している。当初は、目標をなかなか継続できない教員がいるなど、日常化が難しい時期もあったが、スクールプランでの重点化も4年目を迎え、各学級ごとに週に1・2回図書室に貸出に行くことは当たり前となり、令和4・5年度においては、全ての学級で日常的に読書活動が行われている。「行くのをすっかり忘れていて子どもたちから文句を言われる」と話す担任もいた。今年度他校から異動してきた、「すきま時間に読書を始めると、どの子も読むことに集中するのに驚いた」と述べる担任もいた。面談では各教員の取組に感謝し、特別な取組でなくても学校全体で継続することで成果が必ず出ること、それぞれの面談ごとに伝えるようにした。今年度の面談では、取組が定着し、児童が読書に親しんでいる状況が確認できて、非常にうれしく感じた。

⑤ ベテラン教師の取組の影響

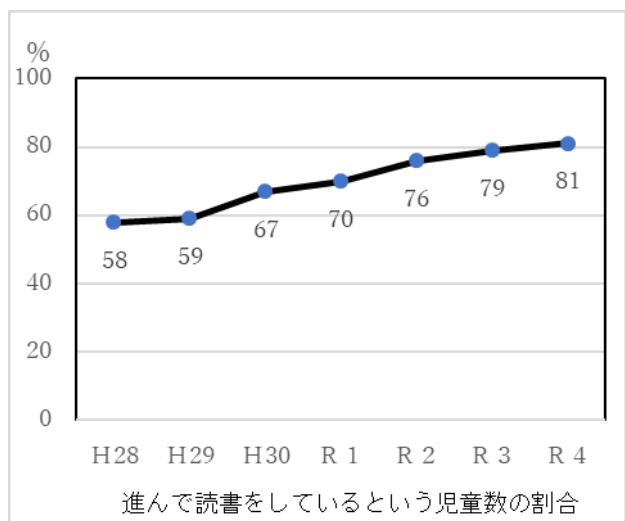
令和2年度に6年生を担当した再任用教員がいた。この教員は、長編の物語を毎日少しずつ読み聞かせることを日課としていた。その年最初に読んだ本は、「二分間の冒険」(偕成社)である。かなりの長編で、読み終えるまでにはかなりの期間を要する。落ち着かない児童が多い学級であったが、読み聞かせの時間になると、どの子もじっと聞き入る姿が見られた。挿絵もなく視覚的な刺激がないまま語られる冒険物語の世界をじっくり楽しむようになっていったのである。「二分間の冒険」は、この教員が長年の経験で得たとおきの一冊であった。夏頃にはこの長い物語の読み聞かせを終え、2冊目「十五少年漂流記(二年間の休暇)」(岩波書店)の読み聞かせに入っていた。この教員は1年間をかけて3冊の長編と数冊の短編を読み聞かせた。落ち着かなかった学級も担任を中心に6年生らしくがんばる学級へと成長していった。私は、この様子を積極的に若い教員に伝えた。この変化に驚き、自学級でも読み聞かせにチャレンジする教員が出てきた。学級が落ち着いたのは読み聞かせだけがよかったわけではないが、読書には子どもたちを引きつける力があるこ

とを、このベテラン教員の取組から学ぶことができた。学校は、若い教員とベテランの教員がともに働く職場である。先輩の実践に学んで自分も取り組んでみる、そんな文化を醸成できるとよい。

5 成果

本校に校長として赴任してから3年間、現在4年目を迎えている。4年間通して、スクールプランの重点項目に「読書活動の推進」を掲げ、学校全体で継続的に取り組んできた。現在は、どの学級の児童も「本を借りること」「本を読むこと」が日常化し、本のある生活が当たり前になっている。

令和2年度から4年度にかけ、年度末の児童アンケートで「私は進んで読書をしている」と答える割合が増え、下記のグラフのように、平成28年度には58%だった割合が令和4年度には81%に達した。令和2・3年度はスクールプランの数値目標は75%であったが、令和4年度は80%に設定し、いずれも数値目標を達成することができた。



また、令和5年度の全国学力・学習状況調査の質問紙調査結果からも成果が感じ取れた。本校6年生は、「学校の授業時間以外に、普段(月～金曜日)、1日どれくらいの時間読書を読みますか」の質問について、30分以上と答えた児童の割合が、全国平均37.3%、福井県平均31.7%であるのに対し、本校平均は45.7%であった。さらに、「休み時間や放課後、学校が休みの日に、本を読んだり借りたりするために、学校図書館や公共図書館にどれくらい行きますか」の質問について、月に1～3回程度以上行くと答える児童が全国で32.9%、福井県で39.2%であるのに対し、本校は52.8%であっ

た。

これらは、あくまで数値上の結果であるが、これまで、各担任が学級で日々取り組んだ成果であると前向きにとらえ、これを励みとして、今後も児童一人一人の様子に目を向けながら、地道な取組が当たり前になる日常をつくっていったらよいと思う。

さらに成果として、担任の中に読み聞かせやブックトークを始め、定期的に行う教員が出てきた。国語や学活の学習活動の中で、児童がブックトークをしておすすめの本を紹介する活動に取り組んだり、アプリを利用して児童が読書記録をつけ、様々なジャンルの本を読むよう働きかけたりする教員もいる。図書委員会の活動や学校司書の取組も充実し、読書活動推進の刺激、良いきっかけとなっている。児童だけでなく、児童に関わる教師自身が読書に興味をもち、自ら取組を進める意識が高まったのが、何よりうれしい成果である。

6 今後の課題

児童は、図書室に行ったり、本を読んだりすることを日常の楽しみとするようになってきたが、次のステップとして、「良い本を読む」ことに取り組めるとよい。

読書は楽しむものであり、読む本は自由であるが、良い本は児童のより良い成長につながると考える。読書を通して、児童が豊かな語彙を獲得し、想像力を高め、深い思考ができるようにしたい。物語の中で様々な考え方に触れ、様々な生き方を知ることは、つまづきを感じたときの心の支えとなり、人生を豊かにしてくれると考える。

良い本は、読んでみるとなかなかおもしろい。児童の手がより良い本に伸び、そのおもしろさに気付くように、読み聞かせやブックトークで伝えたり、教室や図書室で紹介する読書環境を工夫したり、できることを教職員みんなで話し合いながら、少しずつでも充実させていけたらよいと思う。

年度末に実施する保護者アンケートに、令和4年度より「我が子は、進んで読書をしているか」という質問を加えたところ、肯定的な回答は49%であった。進んで読書をしていると答える児童が81%であるの対し、大きなギャップが生じている。家庭で見る我が子は、そこまで進んで読書をしているようには見えていない。家庭によって時間の使い方が様々で、読書が好きで家でも本を読む子もいれば、家ではゲームやテ

レビを楽しむ子や、スポーツ少年団や習い事に忙しい子もいる。家庭での過ごし方はそれぞれであるが、児童自身が読書を楽しもうと、家でも自ら時間をつくってけるとよい。また、学校だより等で、学校で読書を楽しむ児童の様子や読書の大切さを保護者に伝える機会を設けていきたい。小学校教育として、読書を楽しむ習慣の基礎をつくっていくことは必要だと考える。



担任の読み聞かせを楽しむ

7 おわりに

コロナの流行をきっかけにタブレットの活用が急速に進み、国や都道府県がICTの活用や教育のDXに力を入れている。どの学校のスクールプランにも「ICTの活用」が重点項目として掲げられている。児童だけでなく、教職員の生活にもパソコンやタブレット、ゲームやSNSが大きく入り込み、興味関心は高い。校長である私は、その進歩についていくのに必死である（あまりついていけないのが現状であるが…）。興味関心の高い分野の進展は速い。タブレットの活用は日々進み、多様で有効な授業の在り方が提案されている。

反面、興味関心が今一つ低い読書活動は、大切であると言われながら、なかなか浸透していかないのが現状である。

だから、そんな読書活動こそ、学校で力を入れるべきではないかと、私は思う。興味関心の高い子にも低い子にも、同じように働きかけることができるのが学校である。子どもたちには、豊かな人生を歩んでほしい。そのために、どの子にも読書の楽しみを保障してあげたい。きっと将来生きて働く力となると信じている。